

ような体制を指すものと考えべきである。このことは、基礎物理学のような分野の研究体制が——かりに時代とともにどのように変わっても——保証し確保すべき研究者の基本的自由であると私は信じている。坂田先生がかつて基研を「学問の自由」の新たな発展を制度化したものと位置づけ、「単なる共同利用研究所に墮落する」ことを戒められたのもこの趣旨であったと思う。

これはいわば（私の信ずる）大原則であって、基研における固有部門の存在意義や果すべき役割もこの原則をふまえた上でより一層積極的に位置づけねばならないと考えている。このような考え方に立脚しながら、基研の運営や体制の方式を再構築し、貴重なものを継承しながら古い殻を脱ぎ捨てて行くように努力したいものである。

以上、問題点の一部に触れたにすぎないが、あとの討論のきっかけとして御参考になれば幸である。

（終）

並木： 牧さんのお話は、研究会提案について、所員は外の人と同レベルでやるということだった。それとは別に、初期に、木庭さん、早川さんは、所員研究費をうまくお使いになって、自分が重要と思うテーマについて、ワーキンググループをつくってやったというのを記憶している。そういうのは何時頃からなくなってしまったのか。木庭さん、早川さんはそういう意味でずい分努力されていたと思う。

牧： 今年度から、自由研究費を二つのカテゴリーに分けて、所員の研究に密接な project で人を1ヶ月なり2ヶ月なりお呼びする「所員研究費B」を設けた。これは所員が研究部員会議のメンバーの一人として研究計画を出すことと矛盾しない。

コメント 1. 基研のこれからの在り方を考える

筑波大・物理 岩崎 洋一

基研は創立以来この30年間、全国の研究者にとって重要な役割を果たしてきた。これからもそうあってほしいが、この30年間の間に、囲わりの情勢も大きく変化したし、かつて重要な役割を果たしたものの中には、形骸化しているものもある。これ等の点を考えると基研は1つの曲がり角にたっているといっ

岩崎洋一

てよいであろう。1度あかを洗い落して、新たに直す覚悟でやる必要があるであろう。

では、そのときの目標は？

① 地方分権の時代

九州、中国、四国、北海道、東北、etc それぞれの地方で拠点を強固に作っていくことが必要。
すなわち、それぞれの教室での日常的研究（黒板の前での数人によるギロン等）が一番大切。

このような基盤があつてのみ、500人位という大きな集団の研究者の共同利用研として機能し得るであろう。

② 所員の研究し易い研究所

これは共同利用研として何を期待するか？という問題である。全国の大学へのサービス機関であるという考え方を、所外の人、所内の人ももっていると思うが、まずこれを止める。

もちろん、いわゆる地方大学の人を含め、研究会なり、アトム型として基研に来たときに、それ等の人によって有益な研究所でなければならない。

その為には、基研において“物理”が活発であることが必須の条件。

①と②の条件が満されて、“集まる”ことの意義がでてくるのではないかと？ そうでないと“集まる”こと自体が目的化されてしまう危険がある。

③ かつて、将来計画、大学院問題小委員会等の為、教授クラスの人には時間的にも、精神的にも、とても忙しくて、研究所に居る間は研究できないという状態であった。規模が小さい研究所として宿命的な問題かもしれないが、研究所としては中心になる人がいて特色のある研究所にするということが重要だと思う。

基研の長期的な問題はもちろん重要な問題であるが、この点に関して、運営委員会のあり方をもう一度考えてみる必要があるのではないかと？

④ 研究部員会議はうまく機能しているのだろうか？ 研究部員会議の重要な役割の1つに研究会の立案、決定があるが、最近では全体に7掛とか8掛とかいう方法で決定されていることが多く、また今まで続いてきた研究会が通り易く、新しい研究会が、あまり立案されなく、また通りにくいという点もあるように思われる。研究会の立案、採択等も、例えば、もっと所員にまかせたらどうか？ 所員がレフェリー等の意見をもとに決めた方が、機動力もますし、内容による採択ができるのではないかと？ 研究部員会議は、かつてはもっと実質的に機能していたのであろうが、最近では、ただ存在するから継続しているという面がないだろうか？

研究部員会議を一度思い切ってやめてみたらどうか？ その上で全国の研究者の声によって必要なら、又別の形のものをつくるのも一案と思います。

以上思いつくまま勝手な事を述べましたが、浅はかな考えのところもあると思います。基研が少しでも更に良くなることを願つてのことと御容赦下さい。

久保： 若い人が来たときに discussion してくれるような所員であって欲しいというお話は、もっともだが、物理の分野が広がっている現状では、誰でも相手に出来るという人は滅多に居ない（笑）。限られた数の所員しかいなければ、おのずから相手に出来る field は限られてくる。

岩崎： 早くに答えてほしいというのではなく、問題の考え方や、類似の問題での経験などを教えて貰えばよい。議論しているうちに、問題を解く可能性の方向が得られれば良い。

原（康）： 所員の方が忙しくて相手にしないのではなく、運営委員会が、アトム型として discussion を好まない人を選んでいるのでは。

並木： 所員側としてもお答えになった方が良いのでは。

牧： アトム型の selection はそんなに severe ではなく、申し込みの7割が通る。その人が所員のところに議論にやって来るだろうとか、或いは観光に精を出すだろうかなどという criterion はつけていない（笑）。さっきは、岩崎君の言われたこととは逆の面でのアトム型の存在意義を言った訳です。

岩崎： アトム型の問題は、受け入れ側と、来る人の両方にあり、所員側にだけ問題があると言った訳ではない。来る人の物理がまず問題で、所外の人も、所員の方の時間的、精神的余裕をもう少しつくるよう考えるべきだ。

高木（富）： 教授の方が非常に忙しいということの内容について、もう少し詳しく（笑）。

牧： 忙しいことは弁解にならない。私については力不足という外ない。基研は4部門で、共同利用研としての機能を果たす為に、自分の研究ということ以外に、研究者グループ全体との関係で、take care しなければならない仕事が山程ある。その忙しさはこの10年来年々増えて来ていることは確かだ。基研は四部門だが、6～7部門、極端に言えば8部門ぐらいの研究所のやっている non-academic な business の量をこなしていると考えられる。教授だけではなく、他の方もそれぞれ忙しい。勿論、普通の物理教室に属している方もお忙しいことと思う。全国的に大学の staff が non-academic な business に忙し過ぎるということは大変な弊害で、これは日本の学術体制の大きなゆがみだと思う。将来計画をかかえて文部省に行くと基研とは一体どういう研究所なのか、他の研究所とはどう違うのか、その必要性を明らかにせよと言われるようだが、今のような文部省が果して必要かと言われたら、どうも僕は疑問に思う（笑）。外国ではもっとスマートに、学術研究省とか、もう少し学問の効果的な発展に順応出来るような官僚組織でやっているのではないか。

並木： 岩崎さんが基本的におっしゃりたかったのは、研究会決定にしても、アトム型にしても制度が形骸化して実質的運営が出来なくなってしまうのではないかとこのころにあったと思う。この問題はあとの総合討論で是非お願いしたい。

川口： 私は20年前、ここの助手だった頃、学問の議論をふっかけて答えてくれるという人は確かにあった。それは記念館ゴローそののなれの果てがここにも何人か居られる訳ですが—そういう方が実に親切に議論の相手をして下さって、大変プラスになった。必ずしも問に対して的確な答が得られなくても議論をするということ自体が大切だ。コンピューターのプログラム相談室というのがありますが、相談員に質問の形を整理して、分り易くする努力をしているうちに自分で判ってしまうという

大槻昭一郎

ことがある。更に色々の経験から自分の見る角度と違う角度からの質問をピントはずれでもプラスに活かすということで、岩崎さんのおっしゃる討論というのは是非必要だ。

コメント 2.

九大・理 大槻昭一郎

基研の発足は、Nakano–Nishijima–Gell–Mann の法則が提唱される前夜、すなわち、ハドロンの複合構造、相互作用の量的・質的な階層性、構成子と豊かな内部空間等がほとんどわかっていなかった時期であります。小規模のこの共同利用研究所がその後の基礎物理学の発展に与えた寄与の大きさは、奇跡的とさえ言ってよいでしょう。

しかし基研とそれをめぐる研究体制がこの寄与にふさわしく整備されていたわけではなく、事実何度も議論されてきました。全国的規模での最初は、1956年のそれであったと思います。そのなかで、深刻な就職難をかかえた当時の院生、私の世代に強い印象と大きい励ましとなったのは、Sakata テーゼとも呼ばれた「風運の書」の中の短い一文であります。

「議論の前提となるべきこと（坂田昌一）」

現在素粒子論グループの組織とか基研の運営について種々な意見が出されていますが、次の二点が議論の前提となることが望ましいと思います。

- 1 素粒子論グループについて（略）
- 2 基研について

基研の成立は上の闘いの中で素粒子論グループが獲得した自由と、その段階において定着し、実体化したものであります。従って基研の運営はたえずより進んだ形態を目標として行うべきで、現状に固定されてはなりません。基研の理想的形態は素粒子論グループの中核として、この分野におけるフランスの CNRS、又は社会主義諸国の科学アカデミーのごとき役割を果すようになることだと思います。基研をこの方向に発展させる努力は、基礎科学の全分野に新しい組織を打立て日本の自由な学問を守る運動の先駆として進歩的意義をもっています。流動研究員制度の導入はこの線に沿う改革の手始めとして考えるべきです。基研が単なる共同利用研究所（又はそれ以下）になり下らぬよう努力しなくてはなりません。

——「風運の書」（1956年10月）p. 11 素粒子論グループ事務局発行 ——」

いうまでもなくわが国の研究は、教育体制に寄生しつつ行われており、基研も、例外ではありません。“大学の自治”の傘の下に置いた基研、すなわち大学付置の共同利用研というアイデアは、当時、貧乏人